



「もう一度与えられた命と共に」

大学一年の秋、私は車と壁に挟まれる重大な事故に遭い、12か所を骨折し、生死の境をさまよいました。意識を取り戻したとき、そこは集中治療室。喉には管が挿入され、声も体も動かず、ただ天井を見つめることしかできませんでした。静まり返った空間で、自分の未来が突然途切れたような感覚に襲われ、言葉にならない不安だけが胸の奥でうずまいていました。

入院から一週間が過ぎた頃、張りつめていた心がふと崩れ、涙があふれ出しました。そのとき、医師や看護師の皆さんが静かに寄り添い、私の恐怖や迷いを受け止めてくださいました。その温かさは暗闇に差し込む光のようで、「ここからもう一度歩き出したい」と思う力を与えてくれました。痛みは想像をはるかに超え、二か月間にわたり強力な薬を使ったことで中毒の危険にもさらさ





れました。「一生歩けないかもしれない」と告げられた瞬間、世界が崩れ落ちるような感覚を今でも覚えています。動かせるのは左腕のみ。寝たきりの日々が続き、座ることさえ困難でした。それでも、私は四か月にわたる長いリハビリに挑み、座れるようになるまで二か月、立ち上げられるようになるまで三か月——通常の四倍もの時間をかけて、一步ずつ前に進みました。担当の先生と交わした小さな笑いが、重たい日々に確かな希望を灯してくれました。

この経験から、私は「命の尊さ」と「今を生きることの重み」を痛いほど学びました。それと同時に、事故が人生を根本から変えてしまう現実を痛感しました。奪われるのは身体の機能だけではありません。痛みのない日常も、大切な時間も、心の平穏さえ奪われる。それゆえ運転する人には、「誰かの未来を奪う側になるかもしれない」という事実を決して忘れないでほしい。この願いは、





私自身の誓いでもあります。

現在、私は工学部で機械工学を学んでいます。事故を経験したことで、「学びをどう社会に還元するか」という視点を強く持つようになりました。まずは学びを深め、工学の基礎を確かなものとし、医療の現場で役立つ知識と技術を積極的に吸収してまいります。そして将来的には、工学と医療をつなぐ架け橋として、現場で苦しむ人々に寄り添い、命を救い、日常を取り戻す手助けができるエンジニアを目指してまいります。その為国際的な視点を養い、世界の医療技術や安全工学の動向にも学び、幅広い知識を身につけたいと考えております。また、事故で支えていただいたように、今度は私が支える側に立ち、社会に希望と安心を届けられる存在でありたいと願っております。

二十歳という節目を迎えた今、私はこの命に心から感謝しています。困難を糧に変え、支えられた命を今度は支える側として生きていく。痛みの





先に見つけた希望を胸に、感謝を力へと変え、誰かの明日を照らす存在となれるよう、これからも努力を重ねてまいります。

